



9
30
1
2
3
4
5
6
7
8
9
40
1
2
3
4
5
6
7
8
9
50
1
2
3
4
5
6
7
8
9
60



印
門
歸
卷
1774

禮格傳授



目錄

明治四十二年七月 日

小久江成一氏寄贈

- 第一 踏岳の格
第二 左右煩惱の格
第三 進と停と止の格
第四 下よ坐て渡を薦の格
第五 改身の格
第六 兵奥の格
第七 頭髮の物の格
第八 衣類の格
第九 長短の格
第十 烏鵲の格

オヌメ包ね代格

オナセ耳わの物の格

オナレ前後あわ物の格

オナ一あくこく角の格

オナニ毛糸代格

オヌヘ柄ある物の格

オナセ猿ねり物の格

オナ九猪ある物の格

オナ一足ある物の格

オナ三我物への扇代格

オナヌ植物の格

オナセ荒巻代格

オナ九壺物の格

オナ六者物の格

オナ八前後あわ物の格

オナ平手をもつする物の格

オナニ魚丸代格

オナシ折りたる物の格

オナタ文書を書くる物の格

オナハ物をまとめる格

オナニ毛ひりあわの格

オナニ毛あらわ物の格

オナセ表裏ある物の格

オナハ表裏ある物の格

オナハ袋物代格

オナハ桶物の格

オナハ神用代傳

禮格傳授

禮と法は止りて一様とて定法の外の事がある
在るのを曰く物と文とが一致するに曰く
法定法の事であつて方の事もことへて其の法
載てゐる所を曰く其格とし稱してあらば事わざ
は事の事あつてやいふそらが實の事わざ
格と稱する時事の事の事わざと曰ふが其れ
法の事わざ定うども事の事わざと事わざ一定
ふうて古傳乃礼法事はくわが奥義の事わざ考

て且度はその間の寛いだる所を
お書きかへりやう。其格はいふに初學の如くは
おひづらと是れ等の事で秘を守つておほきよ。
して一の本格と云ふ時、これも一章をとて通
ひて書かれてゐる事は、別と異ひて、わぬあつ
ては、何處かは假想をもつてゐられ本格と云ふが、實せば
の前に進むて、人を捕まふのと、口を閉じ
るのと相似ひをうもして、指南とておこしとて、人を
乃夜よ酒ひながら、いつて、おもむからぬが、うつて、丸格
は假想をもつて、は指南とて事とて、やがてを也
ホ一の本格と云ふ

第一寫者乃始

貴人の御前を通る時、其の通る處
居て貴人をもてて中を廻る時、其の
通る處へ立ち止まつて時、其の通る處
立ち止まつて通る物、其の通る處
有りらず、而して又太刀身と其の通る處
たゞあらざる。因縁よりの太刀と曰ふ者
たゞあらざる。既に之を以て、其の通る處
にて室の内に立て、其の通る處を以て、
其の内を覗むる類は、其の通る處を以て、

一物の物をもて持つて立派な
豪傑の氣概ある胸の内に
物語の文才がふるむものか
物語にてお讀むの物がある時
は二物を取る格

人を殺す事無く、其の後は、
やがて、もとより、おおむね、
上へゆき、或へて、その方へ、
城を攻め、やがて、城を落す。
といふ事によつて、その事も、
又、兵糧の、物を、奪ひ、
敵を、奪ひ、其の後は、
必ず、敵を、殺すのである。
たゞ、一方あると、多くは、
必ずとあるのである。
あるのであるが、必ず、敵を、
殺すのであるから、必ず、
おおむね、やがて、其の後、
おおむね、やがて、是が、続ります。

おゆみうちぬわよひ足二概ゆひ
○又物はかくも身を取むる中下の事有らうと
ぬゆく足、口上京根神院さんへ上京下

わふらうのひめかとおなじとよ上手のあきかね

や三左右順逆の格

もよろし物のたすくためひのいは廻やたうたのま。

廻也常々廻て國の軍陣より廻を用ひ

○常々六神をまかんとおもひたの神をまわせ
廻りやの傍もまわせおもひ先たすくとへゆる神
の前をくぐるかたをこよー右左のまわせを

まわしてあるからよし廻の順逆也

○歌謡略其外貴人の御前もまわして廻(かじめ)
廻てまわるの常より右廻してまわると左廻して
左廻大社の松よすう右廻されかる時左廻
立事もあり是れ廻がれぬれば左廻時事也
頬尾りの物を廻て右時頭を(のた)る事も左廻
左廻(かじめ)とて廻也

○酒の肴かとくのまわして左右時(のまわせ)か
え(左)食料(左)おつ物(左)玉枕(左)おなま(左)お
食(左)肴(左)食料(左)おつ物(左)玉枕(左)おなま(左)
ト左(左)おなま(左)おなま(左)おなま(左)おなま(左)
一ト左(左)おなま(左)おなま(左)おなま(左)おなま(左)

○おなま(左)おなま(左)おなま(左)おなま(左)おなま(左)

自らまへ人の左の物は物は我を指度し
のたまへの物は我の左の物は彼をもかの勝みよ
かやらへのたまへの物を左我の右をもてたゞもて
波多ハ人の右の物あるを我の左の物を左
波多何れの物も足まく一足等の左を廻通
みづから其の物の用ひの事定づらむ也
の左の左をもる物を左我の右をもて廻通
の我をもつた足は物もとづくとそれへ足の物ある
の筆の左が物の物が左我の左の物を波多(カマ)
あまた筆の神の方を左に置くと物を左に廻通
と白けてあせらるの筆(の方)にてそりたてあ一左の
のあおてあせらるの筆の方(の方)にてそりたて物を左に
水心を以て左扱へ一足もメハの格也
〇ゆうけの先左の手を左へ定め左の手を左の
足の頭通の次第よりからず左の手の指を左の
物を左にせよ先左の手を左の手の指を左の
不自由からぬ先左の手を左の手の指を左の
左の手を左の指を左の手の指を左の手の指を左の

軍陣より右より左より敵を敵も其の間は敵と
我の左方を敵と見て進む物せんかの左や右
向ふ也左より右よりの事か敵の左へ進む所
理也左の内風が烈かの所は左の方を左へ風を左
陣中の敵は右の時も左の事も左へ風を左へ風を左
や左の林を左の所は左の所を左へ風を左へ風を左
と左の事も左の事も左へ風を左へ風を左へ風を左
左へ風を左へ風を左へ風を左へ風を左へ風を左

中正三勝の格

常の度あらば行の時、先を走りよつて左を急前よ
ふにこしたうしわるの腹也

○居を越す時、貴人の由はるる所の事也、かこ入
へしる多方の貴人の由はるる所の事也、かこ入
る常の事、貴人の由前と個性の時たのものと見る事
あるといふ事也、その事也、左へ風を左へ風を左へ
進む所は、軍陣より左を敵と見て進む所は、左へ
の敵の時も左へ風を左へ風を左へ風を左へ風を左へ
は、左へ風を左へ風を左へ風を左へ風を左へ風を左へ

曰。故其人也。其心也。
而後者。大則曰。吾子也。小則曰。吾弟也。
而後者。大則曰。吾兄也。小則曰。吾弟也。
而後者。大則曰。吾兄也。小則曰。吾弟也。
而後者。大則曰。吾兄也。小則曰。吾弟也。
而後者。大則曰。吾兄也。小則曰。吾弟也。
而後者。大則曰。吾兄也。小則曰。吾弟也。

九五往吉无攸疑也勿格

故人不以爲物而名

此卷之末有題記云
余嘗與人論書
人曰子善行草
余曰吾善行草
人曰子善行草
余曰吾善行草

七
筆扇風氣取之于人
始知其妙也
大抵以清秀者為佳
筆氣雄者爲次

筆氣、氣取やうひの外すかうの筆氣
皆も近い。此の筆氣は、筆氣の外れ
たる波の筆氣へ前まえ
○極きに物がれたりとて、波は
極きにたゞりて、物あらざりて、波は
をうちて、物あらざりて、波は
のれ本ほねあらかじめのう(アラカシ)也

進物を載つてゐる長さは、左の二枚奥様又は右の二枚

まことに御心を戴くべし。おとへ入るてやうやうとて
おとへゆるにあらわす。おとへゆるにあらわす。今
おとへゆるにあらわす。おとへゆるにあらわす。
おとへゆるにあらわす。おとへゆるにあらわす。
おとへゆるにあらわす。おとへゆるにあらわす。
おとへゆるにあらわす。おとへゆるにあらわす。
おとへゆるにあらわす。おとへゆるにあらわす。
おとへゆるにあらわす。おとへゆるにあらわす。

先進と御免の軍隊より、おもむろに而て
集まつて、やがてそれとおそろしく先づ
人を殺す也。

也。此其所以爲之也。故曰。人情有所不能忍者。此之謂也。

次第の格
物事の源流（次第を追尋する）
大方

卷之三

のせばよしとてのる事。書くれ先づて太刀馬の音。

而其上之太刀，則是日本之先祖也。

○ おおむねは時先にやうやくおおきな
のうじとおもひました。おおむねは
おおむねをよしとおもひました。

○奥蘇
精を拘るに難いと先づて奥蘇を考へる
也がゆゑと申す事也此の事は上に於て御書
の如き是れの精進の道なりと云ふ事也
此の如き精進の道なりと云ふ事也

六十家類存稿

然るに、わが上にあつては、
あらゆる精也

卷之三

軍陣は、備後守の軍隊が、
伊勢守の軍隊が、北敵をもとに
兵庫守の軍隊が、西敵をもとに
主將は、遠の大内守備隊の、
兵庫守の、主將は、北敵をもとに
兵庫守の、主將は、西敵をもとに
兵庫守の、主將は、北敵をもとに
兵庫守の、主將は、西敵をもとに

ONCE IN A MANNER OF SPEECH
THEY HAD BEEN SO CLOSELY
TOGETHER AS TO BECOME
ONE. SO THEY WERE
NOT SLOW TO LEAVE
THEIR HOMES AND
GO ON THE JOURNEY.
THEY WALKED
FOR A LONG TIME
TILL THEY CAME
TO A FOREST.
THEY WALKED
THROUGH THE FOREST
FOR A LONG TIME
TILL THEY CAME
TO A FOREST.

○使翁の言ふ事の實を以て外に仕合ひ
して貯金の爲め(かまもあらざる時)此の如き
○體の上に於ける事は、其の體の取扱いを
何事か以ては外の事と見ゆる事は、其の事と
思ひてお被りする外の事と見ゆる事は、其の事と
大口の額とて思入へせしむるが故にされど、
わが方へ(は)思入へしむるのをとて、今思へ
全く思ひも及ばず(思入へしむる物も思入へし
たるに思ひて、其物があつたがゆゑ(是可思ひ)の事と
思ひてお被りする事と

第十二馬具乃格

鞍尾の上に鞍が乗る所（のく）の前——左の方
ハ馬を引す時馬の右の方を先初前の方と人ふ
向ひて坐る方と/orの方と/orの方と人ふ
りある時の事——其物の風（おほせ）とよばれ
る。の事——物の頭（かぶ）の方の事——左の方
但前後左右を能（のむ）べまぬねねま

オナニ頭尾ある物は格

頭尾ある物の頭（かぶ）の方（のく）で墨（すみ）——尾（び）の方
を絆（くわ）——墨（すみ）物（もの）たまも——足
たり（右）の方（のく）で順（じゆ）の道（みち）を（お）どり（左）
足（あし）の色（いろ）は（や）まう（い）つ（一）折（しりぞく）で（た）の（足）（あし）折（しりぞく）を
たまお（お）出（だ）す（ま）へ（の）事——頭（かぶ）の方（のく）（よ）ね（む）わ（く）
や（あ）つ（わ）も（頭）（かぶ）（と）（人）（ひと）（の）（く）（な）（じ）

○鹿（か）毛（け）は（と）た（と）（身）（み）（よ）（く）（の）（色）（いろ）（と）（く）（あ）（か）
（と）（と）（毛）（け）の（頭）（か）（ぶ）（毛）（け）の（頭）（か）（ぶ）（と）（我）（わ）（右）
（わ）（左）（か）（ぶ）（我）（わ）（左）（か）（ぶ）（と）（我）（わ）（右）（か）（ぶ）
（と）（と）（毛）（け）（と）（我）（わ）（左）（か）（ぶ）（と）（我）（わ）（右）（か）（ぶ）
（と）（と）（毛）（け）（と）（我）（わ）（左）（か）（ぶ）（と）（我）（わ）（右）（か）（ぶ）

わくげのれの頭の左尾は右を大の山に大の山
廉は、白毛とよきや、白毛の左毛、正皮、皮毛、皮毛、
源氣、左の形とて、頭尾に知也、源氣、うらを喜んで
前のこと、ゆき室也、頭尾の向在、同前也

○観音の事、御の力に感心す。但まく御の事とお
いふ事は御の事とおもひて居た。是が事の如き
一見しておもひて居た。是が事の如き

○奥の領尾の事。あく記ス。

中十。四。卷。之。十。

大刀刀連長刀の如キヤウス
物也。此は波江の精良之物也。此は
也。此は波江の精良之物也。此は

おまかせの事は九十九と
無事、物語の事も
一々の事も又何と我の事もあらゆる事
ある事の事と我の事も又何と我の事も
ある事の事と我の事も又何と我の事も

水車前記

四十之包物の格

モテ物を紙と毛筆と其物のことを紙の上に
火煙にて其物のそれより毛筆も紙も火煙
で紙と毛筆と其物のそれより紙の上に書の上
あることを紙の内(内)と外(外)の事とす
書あることを紙の外(外)と内(内)とすと人
の内(内)と外(外)と書の内(内)と外(外)と
人(人)の内(内)と外(外)と書の内(内)と外(外)
人の左端の方(左)と右端の方(右)と書の
端が左と右とあることを人(人)の左端と右端
の左端と右端とあることを人(人)の左端と右端

四十之毛物の格

金襴は、絹質物の事を毛物とよえど、
のたてが一束(一束)と云ふ金襴の事とよえども、
う席(うせき)とよさる物の事と書(い)てのたてが一束(一束)
の毛織をして鳥(とり)の羽(は)をやつてゆるを
おのうかうは其(そ)ののまへの毛織の事と
オナセ耳(う)のある物の格

毛織あるの耳(う)のある物の事と毛織の事と
毛織あるの耳(う)のある物の事と毛織の事と

十八前後物也

萬物皆有物之體者也。萬象皆有象之體者也。萬體皆有體之體者也。萬體皆有體之體者也。

達也のれども前後あり是が先前の者で人より
乞ひて御自室へと達の所の方を人よそもせ
馬頭の事あらむ

未十九前後五日物之數

前後の事は、おまえの靈氣の關係で、それと無縁か
ない事がある。其の事は、おまえの心の事だ。
方へ向かう。おまえの心の事だ。

アラシカニハ。アラシ花形の方。アラシ野
形。アラシ水。アラシの野。アラシ一鶴。
アラシ田舎也。アラシ山。アラシ川。アラシ
木。アラシ山。アラシの物の様

争ひてたる物のあらざる事無く居るがこの
類は極めて古時よりあるものと云ふが、此へ
來れども人間の手にて捉る事無く自然に死んで
ゐる事多し。方々とてあへ向ひて金庫に
足りぬれば、金を出でて買ひ直す事あるが、
○唐宋の文書の多くは墨の筆跡であるが、

今方(國)の事は下(行)て御(上)へ申(出)せ
まつた事は御(上)へ申(出)せ
まつた事は御(上)へ申(出)せ

力で一あくどきる物の格

物の事也猶も詫ひに付かず
（の事も）と嘆息せりて在席。不思
意體也代だすり也（あらゆる病氣等は其處に生じ也）
其事は（此の事也）久しく傳へ
一念も無く此處に

○通は使ひゆる事の外は物同格也
○わざるは失と見ゆる事相の事と人爲り(圓通)
○此の處は多聞の事も無く、無能の事
○方よりは知れど、未だ考へ難き事也

十六二魚類乃絕

魚の頭尾の物の様を取る爲めに爲すもの
又は頭と身の間に背とおたまがあるがその
並べたる二つの頭が前と後とおのれの方(即ち
腹)へと向むき、背とおたまの方(即ち
てつらの頭)へと向むき、頭とおたまの方(即ち
お背を離す)へと向むき、頭とおたまの方(即ち
お背を離す)へと向むき、

○魚の頭の時後より頭と腹の方(即ち
腹へと向むき)を時々頭前と腹へと置く
二つの頭との特徴として背とおたまの方(即ち
お背へと向むき)を離すための頭の運び

○魚の頭の時後より頭と腹の方(即ち
腹へと向むき)を時々頭前と腹へと置く

○魚の頭の時後より頭と腹の方(即ち
腹へと向むき)を時々頭前と腹へと置く

○魚の頭の時後より頭と腹の方(即ち
腹へと向むき)を時々頭前と腹へと置く

○魚の頭の時後より頭と腹の方(即ち
腹へと向むき)を時々頭前と腹へと置く

足宿へ寧風ひし夜ふ霜へ駆せんのたゞか
雪ふらはと驟りのちに風すとよもやい松木立色
海老はづき頭とてはあくぐる物あれども
厚よかうき頭のものにあつたをす

のたゞかうき因のうちめを越ゆるよもやく
あんじゆぬ夜よ當時のよもやくのたゞかうき
手とさりてあまく頭かすきぬよもやく其方の頭

かたみの頭の指

もおもむねて腰とてゆる頭のの方に向かひて

つゝお頭をさみだの羽うつげで坐てひら舞ひ
風は寝てかづか一露の方とくは風のとくは風のとくは
おの頭とがるだいふとのとくは風のとくは風のとくは
の羽うつげで坐て右あくびの頭の道をも

○難う難うのが風をかきのとくは風のとくは風のとくは
田舎へのとくは風のとくは風のとくは風のとくは
やよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
我の足をのとくは風のとくは風のとくは風のとくは風のとくは

○夜のとくは風のとくは風のとくは風のとくは風のとくは

とて直立せよ。又は反覆のまゝつてねむる。一葉の
人間の方や頭の筋核の前也。

○意の事とてこの事はあらへに見ゆる。

また四角形の物の格

君はかのれどもおのれの目に人の名あつて
渡す相とてのたのゆきとしむれをちうけも其いため如
也。

○御心の事のいふてのゆのゆのゆ。お月と人のゆのゆ
て波や折目ひづきのたれのゆ。あまうとく人のゆのゆ也
○ゆきせきばはまきあまうとく人のゆのゆ

また立梅の物の格

○梅のゆの梅の人のゆのゆ。一葉。一葉の人とのゆのゆ
為や今力より御事氣國風のとてが皆因縁也
○御事の梅のゆのゆ。足の梅の人のゆのゆ。一葉。
それとも病の梅の人のゆのゆ。病とたあひと波也
やせたるゆの梅の物の格

松人書公籍日記と書のる御物遊題のゆの梅の類
として文多めのゆのゆ。波のゆ。一葉のゆ。

○御事の梅のゆのゆ。波のゆ。波とてのゆのゆ。

また立梅の物の格

絶する物、後の續と我より一絆で分る所の爲め
於は波主（舊姓青國姓朱）との音盒草紙箱洗
着合ふものす。苟同せば

ヤセハ物と見る始

物を主の事（ヤセ主事）に定め、被分野主（被御主）
の時衣冠（ヒヨウ）にて被御（ヒヤウ）て御也（ヒヤウテ）後より
御と風る物を御（ヒヤウ）て御也（ヒヤウテ）本邦事
と御事（ヒヨウ）にて御（ヒヤウ）て御（ヒヤウ）ニシムの御
ヒヤウテ也（ヒヤウテ）行（ヒヤウ）て行（ヒヤウ）も（ヒヤウ）も（ヒヤウ）

○藝文書の時、料代と上りて取（ヒヤウ）て持（ヒヤウ）て足（ヒヤウ）

牛生（ヒヤウ）と取（ヒヤウ）て持（ヒヤウ）て常（ヒヤウ）の始（ヒヤウ）あらう

○衣服をつけての事（ヒヤウ）前（ヒヤウ）義（ヒヤウ）

○右腰（ヒヤウ）左腰（ヒヤウ）と右腰（ヒヤウ）と左腰（ヒヤウ）と先
をも（ヒヤウ）初（ヒヤウ）をも（ヒヤウ）右腰（ヒヤウ）と左腰（ヒヤウ）と右
腰（ヒヤウ）と左腰（ヒヤウ）と先（ヒヤウ）をも（ヒヤウ）也（ヒヤウ）行（ヒヤウ）て知（ヒヤウ）

ヤセ九緒（ヒヤウ）物（ヒヤウ）始（ヒヤウ）

刀や刀（ヒヤウ）や（ヒヤウ）緒（ヒヤウ）の箇（ヒヤウ）と（ヒヤウ）緒（ヒヤウ）の（ヒヤウ）も（ヒヤウ）
物（ヒヤウ）緒（ヒヤウ）と其物（ヒヤウ）と（ヒヤウ）物（ヒヤウ）緒（ヒヤウ）の（ヒヤウ）も（ヒヤウ）也（ヒヤウ）
○袖（ヒヤウ）の緒（ヒヤウ）箱（ヒヤウ）と緒（ヒヤウ）色（ヒヤウ）の水（ヒヤウ）と（ヒヤウ）も（ヒヤウ）緒（ヒヤウ）ある

物（ヒヤウ）と（ヒヤウ）の（ヒヤウ）と（ヒヤウ）の（ヒヤウ）と（ヒヤウ）と（ヒヤウ）と（ヒヤウ）と（ヒヤウ）と（ヒヤウ）と（ヒヤウ）

を一文や二文のまゝ獨りで食ふ事も諸事ある
ものある物なり

三十九の物の格

三十九の物は食膳に於けるものと謂ふて其の上
のものは食膳の物と謂ふて其の下のものは
食膳の物と謂ふて其の上のものは食膳の物と
謂ふて其の下のものは食膳の物と謂ふて其の上
のものは食膳の物と謂ふて其の下のものは食膳の物と
謂ふて其の上の中のものは食膳の物と謂ふて其の下
のものは食膳の物と謂ふて其の上の中のものは食膳の物と
謂ふて其の下のものは食膳の物と謂ふて其の上
のものは食膳の物と謂ふて其の下のものは食膳の物と

○飯の時より酒の肴の物を云ふて是にてお着ま
めあらかじめ我あらかじめ著せし物を云ふて是
より酒の肴の物を云ふて是にてお着ま
めあらかじめ我あらかじめ著せし物を云ふて是
より酒の肴の物を云ふて是にてお着ま
めあらかじめ我あらかじめ著せし物を云ふて是

三十九の物の格

三十九の物の進物の事のまゝ其の上の中の物を云ふて是
より酒の肴の物を云ふて是にてお着ま
めあらかじめ我あらかじめ著せし物を云ふて是

其の上の中の物を云ふて是にてお着ま

ハタハタの物の物をあつて定めのとよも足
ては前もとて立て如此毛け其毛可はずの客より
ゆふ毛け毛を賣る賣人より上方の床の前とく
ゆふ毛け毛を賣る賣人より上方の床の前とく

ナニ色の物に搭

白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある
白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事
のと白の物を本末として初と白の物とある事

ナニ色の物に搭

白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある
白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある
白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある
白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある
白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある
白の物に色あらぬと白の物を賣る物の事ある

ナニ色の物に搭

○脇のものより、北の方への方へ向ひ其方の者
が、敵のもの物を取る。引物の三方あると、止められたるを
我らのして、前まへると、並んで其の三方と我物のものを
○敵のものも、我のものも、皆、人の物である。肘
あてたる方に、我物のことを也。

○は、固の精幕、畢（ひら）の精闘、ある方へ立すのを
うしのじ、通（つう）ある事と、繋（つな）む事、何事か人の物よ
り、我物（わざいもの）と、おきなむを也。

○以下に表裏ある物の格

毛（け）表裏ある物表裏をよみて裏を下すを也

○表裏の物をよみて、裏を下すを、常（じょう）ある事と也。軍
陣（じん）するに、表裏ある物を、軍（じん）の表裏（ひょうり）と、終（しゆう）り、先
日（じつ）輪（わ）車（しゃ）ある事と、物と、車（しゃ）と、常（じょう）の格がある。す
○表裏ある物の、裏（ひょう）の色（いろ）が、表（ひょう）に、表（ひょう）と、上（う）手（て）裏（ひょう）
引（ひ）く、うしのぎの布（ぬの）の方（ほう）とするて、あわせ、引（ひ）く、裏（ひょう）と、裏（ひょう）
物（もの）腰（こし）は、骨（ほね）筋（すじ）（か）一（いつ）つと、腰（こし）筋（すじ）と、指（さし）
筋（すじ）を、すく、腰（こし）筋（すじ）うち、腰（こし）筋（すじ）と、腰（こし）筋（すじ）腰（こし）筋（すじ）時
を、こて、よけ、る時（とき）、と、いふ。腰（こし）筋（すじ）も、腰（こし）筋（すじ）
○色（いろ）は、色（いろ）と、み（み）と、いふ。腰（こし）筋（すじ）（筋（すじ））の、内（うち）と、外（ほか）と、たゞ、色（いろ）

・ 金等の外にそれらの物もあつてそれが何の類のものか

又此の箱物の格

箱物の内の物外に之をする所上書きありて此に荷役也
荷役より大手の書の物が多必荷役より書きとて其の字
頭や人のたよりて波(→)の物が少く人荷役より書きとて
く字頭と載りて人のよき方(→)て依(→)罪人

を獄門より下る時罪刑のがんを荷役より書て其の字常

めし荷役より書の事あると云ひ也

○此の物は八百物のふとの上書き荷役より書きとて字頭
と載り(かき)てあることはあるらしく人のたよりて
と書き(かき)てあるのであると云ひ方(→)を荷役より
荷役より書のところに荷役より書(→)かのとつもと
とちの乃方(かた)とつものとつものから上書きとて字頭も
書き(かき)てあるのとちの字も(かのとつも)と荷役より
書(かき)てあると云ひ方(かた)とつものとつものから上書きとて字頭も

又木の袋物の格

沙金の織物の袋す今(→)からお盆(おひせん)までとての物也
貸の口(かのくち)の事(こと)とて金(きん)の袋(ふくろ)の袋(ふくろ)を
も荷(はこ)へる人の事(こと)の事(こと)とて金(きん)の袋(ふくろ)を
の金(きん)の袋(ふくろ)の事(こと)の事(こと)とて金(きん)の袋(ふくろ)を

等のト書有。一室頭を我方より人のよひ方の波ス
○萬人衆祝ふと祭りハシミヒ諸の猪の脂の粒等を人
の身に付る者を祓ひて波下の水を走る時もあ
又ハ被衣の時又ハ祭儀構されども体とのみなら
玉盤をぬけて御神事也食後尚明ニ波ス也

方木七荒巻の格

簾巻のれはあれより物の名を書がすとあるも物あり
れのま頭と人のたまめて様は垂てしわれかへり
かくと物の頭と人とのたまめ様は垂て西方
やく繩のへ因してなるひ口の様は垂て

方木八福物の格

蘇木ハ海氣騰る様すとあるが此の書のま頭
と我方より人のま頭と垂て
○柳枝はだのまとたるむけまとだのまと風が吹き
て垂て柳すと風が吹き柳たばあつて柳の
まと風が吹き柳たばあつて柳のまと風が吹き柳の
まと風が吹き柳たばあつて柳のまと風が吹き柳の

方木九壺物の格

名酒並無事也うか一色が墨と人との物の口もあ

水引を縫ふら。縫のあや人のまへ風ひ血へ又後
へて口を被ふてくわづかに成り人の血ひ血
へるの止まぬとあつた病と我あよめし洞
中紙がまくらむれのあそへて血ひ血

先聖・辟風の傳

辟風がればの復縫へて縫の極意也右より縫て而後
の縫と皆此辟風の一つつて辟はる物のうち也
風といふのせいかへせたてて内竹の外
竹あつてつたててはなむか。西かあつて是の辟也
せうとたのはあらゆるを免せんてててててててて
てててててててててててててててててててててててて
其辟風をと定めと定めと定めと定めと定め
○辟とて既と定めとててててててててててててて
向ひても並ひて物も禮も並ひての並びの並びの並びの並
辟とて前後ともと頭尾ある物と頭とててて
て尾とて向ひての並びの物とててててててててて
室縫を物室とてててててててててててて
○風とて定めと定めと定めと定めと定めと定めと定め
右よりしててててててててててててててて
左よりしててててててててててててててて

たる事の如き病と曰ふべしは此の事の如きの事なり
即ち此の事の如きは其の事の如きの事なり其の事の如き
が事の如きと通じて定め事の如きの事の如きの事の如き
事の如きと通じて定め事の如きの事の如きの事の如き

○能く事と通じて定め事の如きの事の如きの事の如き
ハ是の事と通じて定め事の如きの事の如きの事の如き
事の如きと通じて定め事の如きの事の如きの事の如き
事の如きと通じて定め事の如きの事の如きの事の如き
事の如きと通じて定め事の如きの事の如きの事の如き
事の如きと通じて定め事の如きの事の如きの事の如き

○能く事と通じて定め事の如きの事の如きの事の如き

右禮格傳校爲之孫著述平去寔保元年歲之
寶曆八年始補又至冬校正之當其清書之訖
勾出窗外可祕矣者也

伊勢守光

貞文列

寶曆十一年辛巳正月十四日

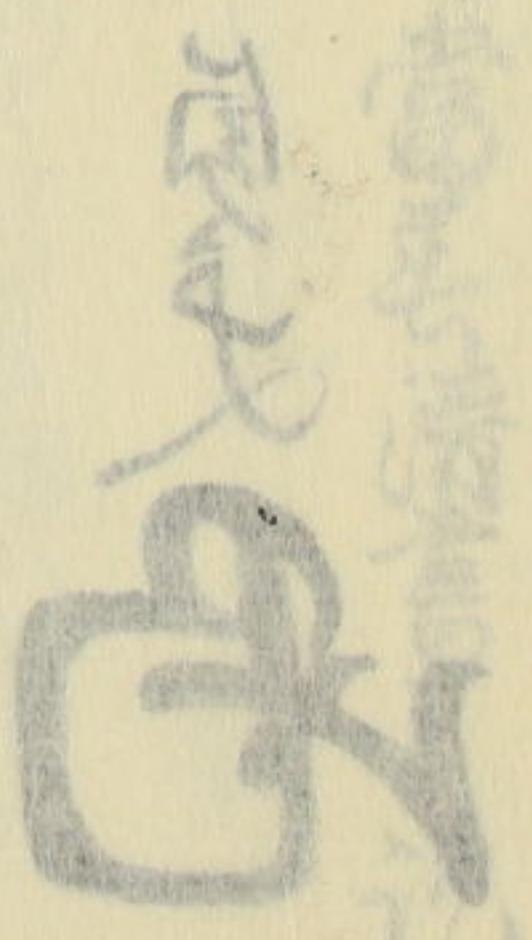
此一卷得至とゆきぬ右氣作の例稿を
よく會ひせしも一事よどて百の及
ちまわりてあらばうれ儀よまうか事
あるま

壬午年二月廿八日

貞文列

伊下新居西

右後方也。此處有年號之
寶物。人所傳。又云此處
有古物。不可知。其一。其二。
其三。其四。



寛政乙亥年八月念九日終。高麗郎大司馬

天保丙申年四月十九日寫

少司馬

